

知的に障害を持つ養護学校生徒における携帯電話を使用した
コミュニケーション支援の検討

- 状況に応じた聞き手の選択とかけなおし行動の確立 -

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
丹生 卓也

知的障害を持つ個人における QOL の拡大、コミュニケーション支援の一つとして、携帯電話を使用した研究が 2000 年以降行われ始めた。今研究においては、いずれも知的障害を伴い携帯電話の使用経験のない O 君と S さんの 2 名の養護学校生徒を対象に、携帯電話による要求言語行動と、その聞き手を状況に応じて選択する行動の形成、そして不在や消去（要求に応じられないという返事）に伴って、等価な機能を持つ別の聞き手（代替者）の選択行動の獲得を目的とした。

O 君においては、通話機能を利用し、宝探し課題を確立化操作として、隠し場所を知る聞き手を携帯電話の 3 名の短縮ダイアルから選択し、選択した聞き手に対する要求（現場へ来てもらうこと）を断られた時に、目的にてらし等価な強化（隠し場所を知っていて教示してくれる）が期待できる別の聞き手を選択する「代替者選択行動」（等価な別の聞き手への掛けなおし行動）の獲得に必要な教授方法を検討した。聞き手の選択行動は、課題分析表を使用した全課題提示法の訓練によりプロンプトを要さず行う事が可能となった。また、代替者選択行動においては、要求が満たされない場面で、「じゃあ（どうする）？」という実験者の言語プロンプトがあれば訓練場面においてこれを行う事が可能となった。S さんでは、メール機能を使用し、物品依頼場面を確立化操作として設定し、物品を持っている聞き手をひらがなで登録してある 6 名から選択し、状況に応じた聞き手の選択行動および代替者選択行動の獲得に必要な教授方法を検討した。S さんは訓練前よりひらがな文字による聞き手の弁別も可能であり、全課題提示法による訓練によって状況に応じた聞き手を選択、代替者の選択が可能となった。

O くんにおいては、別の聞き手への掛けなおしは可能となったが、等価な聞き手への掛けなおしは確立されなかった。短縮ダイアルという選択肢の少なさや場面を一つに限って行ったことが原因として考えられる。今後は着信履歴や複数のダイアルの設定を行い、さらに場面も宝探し 1 場面ではなく、複数の場面の中から適切な聞き手の選択を行うことが必要であると考えられた。